2017.12 No.36

たてやま おらがんまっち

南総祭礼研究会

館山市館山地区

楠見

地域の紹介

地区名の由来は、その昔この地域に大きな楠木が有り、漁師達の目印となっていたことから「楠見」と言われるようになったと言われます。戦国時代に館山城主の里見義康が、新井と楠見に市を開設して町場を設け、そこに上町、仲町、下町という町割りを行い、現在の館山地区の礎が作られました。近代には館山桟橋に汽船が発着し、活気ある港町としても栄えました。

漁民の崇敬が篤い「嚴嶋神社」が楠見集会所あたりにありましたが、関東大震災で倒壊し館山神社へ合祀されました。

楠見区は、館山神社境内から流れる楠見川を有する百四十世帯ほどの地区で、区内の道筋からは城山がよく見え、集会所脇に佇む「六地蔵尊」に見守られている温かい地区です。

自慢の山車

天に向かってそそり立つ四匹の鯱の彫刻は楠見区山車の大きな特徴です。鯱とは、古来より天守閣など飾られ、さまざまな災害から守るよう祈りが込められているものです。近隣地域を見てもこの鯱が彫られた山車屋台は見かけることがなく、大変貴重であると同時に、囃子座欄間上四隅に堂々と据えられた意匠と合わせ、楠見区の山車を唯一無二のものに仕立て上げています。

また「館楠」の山車額上の龍は翼を持った「飛竜」で、これもなかなかお目にかかることがない彫り物でさらに欄間には人々が平穏に暮らす様子が繊細に彫り込まれています。四本の柱は「鯉の滝登り」が見事に彫られていて、下勾欄には「亀」、中勾欄は「牡丹に獅子」、上勾欄は「鶴」が無数に彫られています。人形は仁政を敷いた「仁徳天皇」、下幕は「竹林の虎」、上幕は「龍」の刺繍が施され、山車全体で地域の平和と人々の暮らしの賑やかさが表現されています。

先代の山車は、明治三十三年に神奈川県横須賀市浦賀へ譲渡されたという記録があり、現在の山車は明治三十五年に制作、大工は館野の吉田竹治郎、彫刻は国分の名工・後藤喜三郎橘義信の作です。大正四年には横須賀港開港五十周年祭に出祭した記録も残っています。

館山地区の山車は踊りを披露するため囃子座が比較的広いが、その中でも楠見の山車の囃子座は大きく、毎年勇壮な「天狗踊り」が舞われています。

昭和五十六年に上下幕の新調、昭和六十一年人形修復、平成七年土台の修理、平成十四年に車輪の修理、平成二十一年に泥幕の新調、平成二十九年には提灯の新調がなされてきました。これらは地区住民の協力と熱い気持ちが脈々と受け継がれてきた証であり、未来を担う子どもたちに毎年の祭礼を通して楠見区の自慢の山車と誇りがしっかりと伝えられています。

- 制作年:明治35年
- 大工:吉田竹治郎(舘野)
- 彫刻師:後藤喜三郎橘義信(国分)
- 山車額:館楠
- 人形:仁徳天皇
- 上幕:龍
- 大幕:竹林の虎
- 提灯:巴紋に楠見
- 半纏:背中に楠見

囃子座上にそそり立つ鯱の彫刻

様々な彫刻で埋め尽くされている

山車額の上から見下ろす飛龍

企画:南総祭礼研究会　お問い合わせ:南総祭礼研究会(TEL.090-1531-5307)